

海上保安庁 特殊救難隊

「救う」という信念と技術を支えに
過酷な海難現場の最前線に立つ

漫画・映画「海猿」のモデルにもなった海上保安庁の潜水士。その中でも「特殊救難隊」は特に高い技能を持つ精鋭部隊であり、海難救助の、最後の砦ともいわれる存在です。その目的や職務、そして過酷な任務を支える訓練の様子を紹介します。



特殊救難隊のエンブレム。
隊員だけがかぶれるオレンジベレー帽を着帽

ヘリコプター2機搭載型巡視船 PLH32あきつしま（横浜海上保安部所属）の前にて
（左）榎木隊長 （右）平澤救急救命士

救助・救急体制

| | 潜水作業 | ヘリ降下・吊り上げ救助 | 救急救命 | 火災・危険物・NBC ^{*1} |
|--|---|------------------------------|----------------------------------|--|
| 特殊救難隊 羽田特殊救難基地 1隊 6人×6隊 計36人 | 潜水60m 高度な知識・技術を必要とする特殊海難における人命・財産の救助 | 「リベリング降下」等 (ロープを使って自力で降下) | 救急救命士を配属 |  |
| 機動救難士 函館・仙台・開空・福岡・美保・新潟・ 鹿児島・那覇・石垣基地配備 9基地×9人 計81人 | 潜水8m ^{*2} ヘリコプターと連携した吊り上げ救助等迅速な人命救助 | 「リベリング降下」等 (ロープを使って自力で降下) | 救急救命士を配属 | *1: NBC Nuclear (核) Biological (生物) Chemical (科学) |
| 潜水土 全国の潜水指定船に 計121人を配置 | 潜水40m 潜水技術を必要とする海難における 人命・財産の救助等 | 「ホイスト降下」等 (ウインチを使って降下) | *2: 航空機への搭乗を考慮して 一定の制限を設けている。 | (H28.4.1 現在) |

**高度な知識と技能を携え、
特殊な海難に対応する精鋭部隊**

四方を海に囲まれた日本。海は楽しみ
の場であると同時に、漁業や海上輸送な
ど生活や産業に欠かせない場でもあり
ます。しかし一方で海難が多いことも事
実。近年では地震による津波被害、また
輸送量の増大に伴い、タンカーや危険物

積載船の火災・転覆など甚大な海難事故
の懸念もあります。

そうした海の災害や事故から人命を
守ることも「海上保安庁」の重要な仕事。
その中でも悪天候下での人命救助や火
災船の消火活動など、特殊な海難に対処
するのが、高度な救助技術と専門的知識
を持つスペシャリスト集団である「特殊救
難隊」です。隊員数は、全国に配置して

**医学的知見を持つ
救急救命士
人命救助の際、
救急救命処置を担う**

現在、特殊救難隊は6隊が厳し
い任務に当たっています。
一つの隊は、隊長・副隊長・隊員
4名の6名。隊員は火災危険物・
レンジャー・潜水・救急救命士な
どの特殊技能を持ち、状況に応じ



海上保安庁 羽田特殊救難基地
第五隊 救急救命士 平澤大輔

て人選され出動します。特に救急救命
士は人命救助のエキスパートとして部
隊に必ず一人は配属される重要な存在。
入隊2年目の平澤大輔もその一人です。
「さまざまな海上安全を担う海上保
安庁の中でも、特殊救難隊はレスキュー
を専門に行う唯一の存在です。潜水土
士になって特殊救難隊を目指すようにな
り、さらに多くの命を救うために救急救
命の知識・技能を身に付けたいと思うよ
うになりました」

救急救命士の資格取得のために専門
学校で2年間学び、配属された初めての
現場で「人をケアすること」の重要性を
実感したと言います。
「私たちの任務の第一は救命ですが、
安心を与え、救助された後の人生のため
に『最善の施術』でも必要がありま
す。そのために救急処置のスキルにおい
て、速さと正確さに加え、丁寧さを極
めなければならぬと思っています」



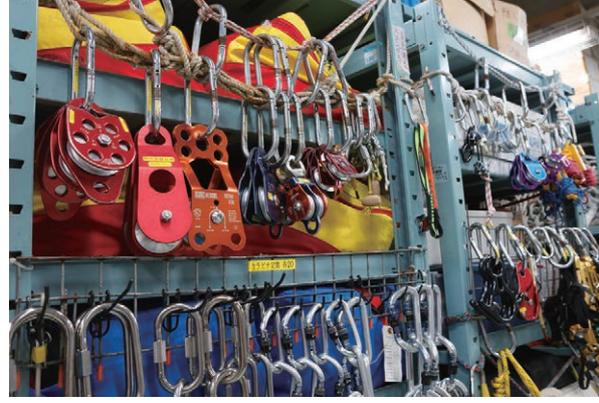
海上保安庁 羽田特殊救難基地
第五隊 隊長 榎木大輔

**思いだけでは救えない
隊長として
限界の引き上げに挑む**

平澤が所属する第五隊の隊長・榎木
大輔も人命救助にこだわり続けてきた
一人です。肩の故障で一度は隊を退い
たものの、大手術を経て5年前に復帰。
救助の最前線への強い思いは、子ども
頃に経験した肉親の事故がきっかけだ
といます。

「大切な人の危機に際して抱く『自分
が助けたい』という思い。それが救助の
原動力となっているのは確かです。でも
それだけで人は助けられません。どんな
に厳しい状況下でも冷静に助ける方法
を考え、実践する。特殊救難隊の使命だ
と思います」
榎木が見いだした答えは、強靱な肉
体や高い技能など個人力を高めること。
毎日のトレーニングを欠かすことはあり

救助に使われる機材。陸上用、海中用など用途に応じてすぐに使用可能な状態で収納されている。



ません。

「チームワークも重要ですが、最後の最後は個の力。隊長として先頭に立ち、隊員を引っ張らなければならぬ」という使命感があります。隊員に何か

あればサポートするのは自分。それが難しいなら隊員へ出動命令を出すのに迷いが生じるでしょう。『隊長が隊のレベルを決める』として常に自身の限界を上げ、保持することが隊長の責務と考えています」

当直・出動と並ぶ重要任務は現場を想定した過酷な「訓練」

特殊救難隊は部隊ごとローテーションで当直勤務にあたります。羽田空港内の羽田特殊救難基地に待機し、要請に応じて全国各地へでもジェット機やヘリコプターで救助に向かいます。

その当直・出動と並び、勤務時間の約半分を費やす重要任務が「訓練」です。

「訓練にはさまざまな意味があります。まずは火災や海中転落など、あらゆる状

況を想定し経験値を高めること。隊長としては、出動時の人選のために各人の技能や体力を熟知することも大きな意味があります」と榎木。

施設でロープを使った高所からの降下や、嵐の海を模した救助などの他、氷の海での潜水や滝のクライミングなど、厳しい自然環境下でも訓練が行われており、その種類や方法はさまざま。相当過酷なものもあり、精神肉体とも限界ギリギリまで追い込まれることも多い。

「自分が『できない』と言えば、隊の限界となり、その時できる救助の限界となります。その限界を上げるためには、自身の技能・体力を可能な限り高める以外ありません。同時に、自身の限界を明確に知ることによって、確信を持って極限まで粘ることができる考えます」（榎木）

巨大な訓練プールで検証実験 転覆船曳航時のロープ取り付け訓練

施設訓練の場合は、横浜みなとみらいの商業施設に隣接する「横浜海上防災基地」。関東地区の大規模な海上災害発生時における海上保安庁の防災拠点としての機能を持ち、「あきつしま」など巡視船が停泊しています。基地内には潜水

用プール、降下訓練用の吹き抜けなどがあり、壁面にはカラフルなクライミングのホールドがびっしり。屋上や壁まで活かした建物丸ごとが訓練の場となっています。

訓練に使う大きなプールには、波の状況など実際の海難現場の環境を再現できるさまざまな仕掛けのある特殊な装置が設置されています。

訓練開始の合図とともに大きな波が現れ、転覆船に見立てた機材が波にもたあそばれているかのようです。うねる波はじぶきを上げ、まるで嵐の海上さながらの激しさ。そこに「水面よし」の掛け声とともに隊員2名が飛び込み、きびきびと機材にロープを掛けていきます。

「転覆船を曳航するのに、効率的なロープ取り付け方法を実験・検証する訓練です。体力的には楽な方ですが、取り付け方を誤ると大事故につながりかね

ない細かな作業のため、とても神経を使います」（榎木）

実際の曳航の際には風や水の抵抗などによってロープの選定や取り付け方を変える必要があります。そこで、プール上部のダクトから強風を吹き出し、ヘリコプターのダウンウォッシュ（ヘリの推力につられて縦に発生する風）を再現したり、深い深度でマスクや空気ボンベを外して体に負荷を与えたり、さまざまな状況下で訓練が行われます。

「まだまだ現場経験が少ない自分には、訓練こそ重要な体験です。想像力を働かせながら取り組んでいます」（平澤）

理論に根ざした救助の技能と体を使って人を救う

大波の中で転覆船にロープを取り付け曳航する。シンプルな訓練ながら、そこにはさまざまな技術や理論が欠かせ



訓練に使うロープを準備する平澤



プールサイドから隊員たちの動きを確認する榎木隊長の厳しい指示が訓練プール内に響く。

転覆船曳航時のロープ取り付け訓練

多くの船には、船首甲板上に係留ロープを掛けるための設備、ボラードがある。船は転覆し真つ逆さまになっている想定なので、このボラードが海中に沈んでしまっているため、隊員は潜水しながらこのボラードに曳航用ロープを掛ければならない。波の高さは数m。大きく揺れる海面・海中での作業となる。



④ 二人一組でロープを掛ける作業。ただロープを掛けるだけではなく、波にもまれながら曳航に必要な細かい作業を行う。

⑤ 声が届かない海中ではサインを出し合いながら作業を進める。



③ 曳航時にすれてロープが切断しないように、しっかりと保護する。

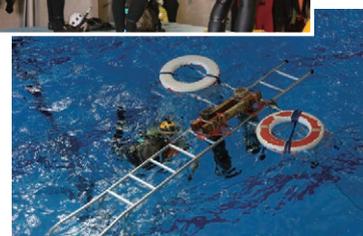
⑥ 作業終了後に全員で確認。



① 使用する転覆船模型を組み立てる。2本の木の杭がボラードの代わり。



② プールに浮かべた転覆船模型に向かう。訓練は三人一組で2人が潜水作業にあたる。



ません。隊員たちはプールから上がると、ホワイトボード前に集合し、訓練について検証や議論をはじめました。

「ロープの取り付け方や牽引する角度など、曳航救助のために必要な基本情報は頭にたたき込んでいきます。ただし、基本をそのままのみにするだけでなく、論理的な実験や検証を行い、よりよい方法を模索するのも大切な仕事と考えています」（榎木）

もちろん机上の空論では意味がありません。他にも曳航救助の理論や危険物に関する知識・取り扱い方法など習得するべきものはたくさんあります。訓練を通じて学び、検証し、その上で再び訓練と照らし合わせる中から、五感として体得することが必要だといえます。

「人命救助が最終目的であり、生死が表裏一体の過酷な仕事ではありませんが、理論に裏付けられた技能と知識を武器に実際に『体を使って』予測不能な現場に対応する。それがこの任務の基本かもしれない（平澤）」



特殊救難隊の“志”ともいえる言葉。機材置き場の入口正面に掲げられている。

創設40周年を経て殉職者ゼロ 不断の努力で進化を続ける

特殊救難隊の創設は、昭和50年。昭和49年に発生したタンカーと貨物船の衝突事故を機に、5人で創設されました。以来、人員増員を経て、設備や技術も進化。水深60mの潜水や火災船での活動、ロープによる高速降下など、潜水士や機動救難士ではできないことを特殊救難隊が支えています。40年間の累計出動件数は約4800件、救助者は約2500人に上ります。熾烈を極める海難現場にほぼ3日に1回という出勤率でありながら、殉職者はゼロ。これも紹介したような訓練を通じて鍛え上げた気力・体力・技術力の賜物といえるでしょう。

隊員たちが毎日目にする機材置き場に掲げられた『苦しい 疲れた もうやめた 人の命は 救えない』の言葉。「必ず生きて帰ってくることを」を絶対の使命としながら、生死の境で任務を遂行する特殊救難隊。その進化の歴史はこれからも続いていきます。